

すぎなみコミュニティーカレッジ 講座記録

講座：居場所づくりプロジェクト サポーター育成

この講座は今日の現代的な課題の一つである不登校や引きこもりなどを視野に入れ「杉並区民のための居場所」をつくるためのサポーターを育成することを目標に実施いたしました。講座内容は施設見学やグループ討議など、参加型の学習が中心となっていました。ワークショップや施設見学の発表記録、先輩の話などを全6回の講座に分けて実施、そのうち第6回の講座内容を参加講師の方々のご好意によりご承諾を得ましたので公開させていただきます。

第6回 Step 6 先輩の話をお聴く・ディスカッション

平成15年3月15日

当日のプログラム

1. 基調講演

進行：伊藤 恵造（カウンセリングルームひだまり代表）

- (1) フリースペース「たまりば」 代表 西野 博之
- (2) 引きこもりを考える会 代表 大塚 史子
- (3) 杉並区児童青少年センター職員 芦川 光伸

2. ディスカッション ~いままでの講座を振り返って~

進行：吉田 壽生(心の談話室「太陽」代表)

1. 基調講演

基調講演 1 フリースペース「たまりば」 西野 博之

こんにちは。西野です。私どもは、フリースペース「たまりば」という居場所を、川崎市の高津区に開いてきました。今年で13年目を迎えます。

今日は居場所というものについてのお話をとということです。フリースペース「たまりば」という場所を簡単に説明させていただきます。

「たまりば」は、子ども達の居場所というイメージがあるかもしれませんが、12年前に始めたとき、元々は不登校の子ども、高校を中退した若者達とその親御さん達の居場所という形でスタートしたのです。その頃は不登校という言葉もなく、登校拒否と呼ばれていました。現在では不登校というのは一般的な名称になってきていますからご存じでしょうが、文部科学省の昨年の発表では、139,000人ぐらいの不登校の子ども達がいることになっています。

この数字だけではピンとこないでしょうが、全国平均で、中学生36人に一人、私がある神奈川県では31人に一人になっています。それくらい、何らかの理由で学校に行かない、行けない子ども達が増えている状況です。どのクラスにも、一人は学校に行っていない子どもがいることになりました。そういう時代になっています。

「たまりば」を始めた頃も、たくさんの不登校の子ども達がありました。当

時、その子達の居場所がありませんでした。“学校に行けない子は怠け者だ、甘えだ”と、親からも先生達からも地域の大人からも白い目で見られていました。子ども達は、学校に行けないだけでも辛いのに、さらに自分で自分を責めることになっていきます。

「たまりば」を始めた頃に、小学校1年生の男の子が語った言葉が忘れられません。「僕、もう、大人になれない。」そう言いました。

私達はいつの間にか大人になっていきます。小学校、中学校、高校、場合によっては大学、就職、結婚して子育て。階段を昇っていくように私達の道筋はありますが、その最初の階段を踏み外しちゃったような、そんな気持ちになってしまった子ども達にとっては、自分の居場所が見つかりません。

「僕なんかダメなんだ、生きていてもしょうがないんだ。」と感じています。そのなかで、その子は、もう大人になれないという絶望的なところで苦しんでいました。

一方に、子育ての責任を全部担わされてしまう母親の苦しみがあります。この日本のいびつな社会構造のなかで、子育てに父親が参加することが非常に遅れています。「こんな情けない子どもになったのはお前の責任だ」と、いちばん支えて欲しいパートナーからバッシングを受け、お舅、お姑さんからも、「嫁のお前が甘やかすからだ」と追いつめられたお母さん達。そのお母さん達もトンネルの中で光が見えなくなって、非常に苦しんでいます。

私達が「たまりば」を始めた頃、私の知っているケースだけでも2件、無理心中に巻き込まれた子どもがいます。たかが学校に行けないだけじゃないか、と冷静に考えれば分かることですが、光が見えないトンネルの中に追い込まれてしまった親御さん達は、もう生きていてもしょうがない、そんな感じに思えてしまうのです。その状態になると、子どもは安心して家にもいられない。

「僕はどこで生きていたらいいのか。家の中で、もしかして親に殺されてしまうかもしれない。殴られる、蹴られる、怒られる、泣き続けている親の悲しんでいる顔を見なければならぬ。もう僕はダメなんだ。私はダメなんだ。」この現状を見据えることからスタートしたのが、当時の私達の居場所づくりです。まずは、ホッとして、“私はここにいていいのだ” “生きていていいのだ”と思える場を作っていこうということです。それは子どもにとっても必要ですし、追いつめられた親にとっても必要なのです。

そうやって多摩川の川沿いの4畳半と6畳のアパートで始まったのが、フリースペース「たまりば」です。「たまりば」という名前は子ども達と毎日遊んだ多摩川の「多摩」、川で「リバー」合わせて多摩リバー、「たまりば」です。「気兼ねなく溜まれる場所」という意味とかけています。

そこに来て、とにかく自分達がホッとして過ごす、したいことをして過ごす、目標はただそれだけでスタートしました。

不登校の子ども達、高校中退、あるいは親御さん達の間として始まった「たまりば」は、いまは少し様相が変わってきています。現在、会員登録制で、川

崎を中心に個人会員が126名です。1日の平均利用者数は約30人。来ている子ども達の層は9歳から30代の真ん中、35歳前後あたりまでが主流になっています。

来られた方は、「あれ、おかしいな」と思うかもしれません。「確かここは不登校、高校中退の人の集まりだよな、親御さんというにはちょっと年が若い人が多いな」と感じるでしょう。

現在の引きこもり傾向というのは、不登校の子ども、何らかの理由で大学を出て就職した後に動けなくなってしまう大人、先生になって、先生自身が不登校になってしまうなど、多様化する様相を見せています。

最近、公的機関のなかに収まらない不登校傾向の子ども達もいます。これは生み出された不登校とも言えます。ひとつには、茶髪、金髪、ピアスを理由に学校から嫌われる。暴力傾向があって、先生をあるいは生徒を殴ってしまい、出席停止になって行き場がない。修学旅行も来るなど言われた。そういう形で学校に置いてもらえない子どもや若者も来ています。

こういう子は、行政が行なっている適応指導教室という不登校の子ども達のスペースにも入れてもらえません。いじめを受けてきた、おとなしい子ども達が落ち着かなくなるという理由からです。

それから病気、障害のある子ども達、彼らも行政の機関から、多くは排除されています。

LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）などラベリングをされた子ども達も、“専門機関に行きなさい”という指導のもとに普通学級から出されます。これもやはり適応指導教室では難しいので、“ちょっと専門機関に行って欲しい”と受け入れてもらえないケースが多いのです。知的障害、精神障害の方も、ここでは一緒にスペースを共存して一緒に暮らして過ごしています。

知的障害の方や、養護学校の高等部を出たあとに居場所がない。こういう若者もたくさんいます。人とコミュニケーションをとるのが苦手で、就労に結び付きにくい。作業所では少し知的レベルが高くて、作業所の中には収まらない。かといって一般就労に就きたいと思うと、これもちょっとコミュニケーションの上でうまくいかなくて、クビになったり、自ら辞めてしまう、そんなケースの方も来ています。

厚生労働省発表のデータによると、日本では60人に一人が精神障害を持っています。しかし、そういう状況でありながら、日本には精神障害の人達の居場所がないのです。

“社会的入院”といわれるような、ご本人の意志ではないのに入院生活を余儀なくされるケースがあります。統合失調症の方達も、本来ならば社会のなかで生きて行けるはずなのに、そういう人達の居場所がなかなか見当たりません。そのような、色々な社会的な背景のなかで、居場所を持たない（持てない）人達が、若者だけに留まらず、幅広い年齢層の人達が集まる場所になってきてい

るといのが「たまりば」の現状です。

部屋のなかの様子は、開けた場所で、皆がそれぞれ好きなことをしています。物作りをする人もいれば、真ん中のテーブルでお茶を飲む人もいます。寝続けている若者もいます。これは、精神科の薬が強くて、1日中寝ているという場合もあります。4～5台あるパソコンの前に座り、チャット、ホームページ閲覧をしている子ども達。その横で、自分達で作ったいろりに炭を入れて、餅を焼いて食べている子ども達。またその横で本を読んでいる子ども達。民間団体の助成金でいただいた民族楽器や電子ピアノがあるので、それを使うこともできます。テレビに向かってダンスのゲームをしている子どももいます。

「たまりば」に来て1年半くらいの中に、髪の毛を何度もいろいろな色に変えたり、眉毛を毛抜きで1本1本抜いたり・・・それを繰り返しながら、自分を一回崩し、崩しながらまた自分を作っていく、そんなことをする子もいます。

一方で、家に居場所を持たない子も来ます。家庭内の様々な事情もあって、家に帰りたがらない若者の層があります。彼らはしばしばカラオケボックスやファミレスで朝まで過ごし、朝になると帰って寝る、そういう状態です。

そのような中で、キャンプやスキー、色々な楽器の演奏、染色、水晶・化石探し、むささびを見に行く企画等、彼らの自主的な提案を、我々スタッフは応援しています。

こちらからはプログラムを持ち込まない場所として、一貫して12年間やってきました。

ここでは不登校、引きこもり等で悩む本人、家族からの電話相談を無料で受け付けています。来所による（要予約）相談も随時受け付けています。また、“たまげた通信”という機関紙を年間10回発行しています。

現在川崎市では、1万平方メートルぐらいの土地に、公設の「子ども夢パーク」という、子ども達の活動拠点を建設中です。2003年7月オープン予定です。プレイパーク、いわゆる冒険遊び場といわれる部分と、施設部分に分かれ、施設のなかにはスタジオを作る予定です。ほかには全天候広場といわれる運動スペース、それからフリースペース部分、そういったものを合わせもった施設を作っています。教育委員会では、ここを不登校の子ども達も来られるような場所にしたいという希望があります。

そこで私達民間のNPOに、“このような不登校の子ども達の居場所をどのようにつくったらいいか”という委託がきまして、私達が教育委員会に対して報告書を提出しました。

現在、川崎市こどもの権利に関する条例の第27条では、子どもの居場所を『子どもには、ありのままの自分でいること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び、若しくは活動すること又は安心して人間関係をつくり合うことが出来る場所（以下「居場所」という。）が大切であることを考慮し、市は居場

所についての考え方の普及並びに居場所の確保及びその存続に努めるものとする。』このように定義しています。これを作るときに私も参加し、色々な手直しをして最終的に校正を通過してきた文章です。

そのときに、私達の方から教育委員会に提案した「居場所の条件」の資料の内容を簡単に4項目に分けてお話しします。

1 番目「ありのままの自分であること」

“ありのままの自分である”には、どういう条件が必要なのでしょう。

まず、世間のものさしを持ち込まない。

世間一般で当然だと思われるようなこと、例えば、“もう何年生だったらこれぐらいできて当たり前でしょう” “男の子だったらこうでしょう” こういう基準を持ち込まないこと。評価を持ち込まないこと。これが居場所の条件として非常に重要であると思っています。

“自分は他人より劣っているのではないか”と、自信をそがれている子ども達のSOSを受けとることが多くあります。

私達が12年間やってきて強く感じるのは、子ども達がすっかり自信を失っているということです。それだけではありません。自尊感情がすっかり失われています。“生きていてもいいのだ”と思えない子ども達がたくさんいるのです。そのなかで、私達には一体何ができるか、どんな居場所を作っていきたいか。そう考えると、まず何よりも、世間の常識というものを持ち込まないことが大切だと思います。

生産性を評価したり、出来るとか出来ないとかを基準に判断するのではなく、“それぞれがそこに、ただ居る”というだけで、周りに何かしらの働きかけをしていることに注目したいと思います。“共に居る”ということは、お互いに、意識するしないに関わらず、影響しあい、育ち合っていくものと考えます。

そして、最も大事なのが、“自分は生きていていいのだ”と思えるような人と人との関係を作ることです。究極のところでは、生きていくという、ただそれだけで祝福されるということが大事であると思っています。

今までに出会ったり、相談を受けた子ども達の中には、「お前なんか生まなければよかった」「生きていく価値がない」と親や身近な人から言われながら育ってきた子どもも、少なくありません。

子ども自らが、“自分は生きていいのだ”と肯定できるような人間関係づくり、これがやはり「居場所」として、とても重要な要素だと考えています。これは、不登校、引きこもりに関わらず、あらゆる子ども達にとって必要なことだと思います。

2 番目「休息して自分を取り戻すこと」「追いたてられずにゆったりとした時間が持てること」

この「時間」というものが実は、本当に馬鹿にできません。ミハヤエル・エ

ソデの“モモ”にあるように、時間はどこかに貯蓄しているようでありながら、実は私達は忙しい時間の中で、何をしたいのか考える時間もなく、どう生きていきたいのかを考える余裕もなく生きてきてしまっています。精神的にも時間的にも余裕がない、追いつめられた子ども達が非常に多いなかで、時間を取り戻す必要があります。過ごしたいように過ごすことが出来ることが大事です。

3 番目「自由に遊び、若しくは活動すること」

押し付けとなるようなプログラムを持たないこと。必要なときに必要な情報が入手できる環境を作る。多様な活動が可能な空間があること。

4 番目「安心して人間関係を作りあうことができること」

これは居場所の条件として非常に大事です。

言いたいことが言える関係性を保障するという事です。

発言した内容によって自らの存在を否定されるかもしれないという不安を感じないで、自分の感情を言葉に出来るということが大事です。全部いっばいに溜め込んでしまうのではなくて、言いたいことが言える関係性をどう保障していくか。

そして、「育つということ」は、失敗を重ねて育つわけですから、「安心して失敗できること」これが大事です。

失敗から学ぶのです。これは子どもも、スタッフである大人も同様です。安心して失敗できることを許される空間で、その関係性を大事にすること。それから、あらゆる形の暴力を受けず、安心して過ごすことができる。

以上のことを、私達は最低限、ここだけは大事にしていきたいということで「居場所の条件」として上げています。

これらのことを書いた資料はスタッフ研修においても使っています。現在スタッフは常勤4人。あとは非常勤で、有給5人、無給6人で構成されています。合計15人体制です。1年間、これらのことを念頭に置き、スタッフ研修をします。

基調講演 2 引きこもりを考える会 大塚 史子

こんにちは、始めまして。大塚史子と申します。ネット上では“ふみこ”というハンドルネームを使っているのので、“ふみこさん”と呼ばれることが多くなっています。

私は本当に普通のおばさんで、何の資格も持ちませんし、教育学等も勉強したことはないのので、今日ここに呼んでいただいて本当にありがたいのですけれども、私の経験がお役に立つかどうか、甚だ自信がないというのが正直なところです。よろしくお願いします。

私がどうして「引きこもりについて考える会」を立ち上げたり、「フリース

ペース」をやることになったかについてお話をしたいと思います。
まず、私が“引きこもり”をテーマとして様々な人達と接点を持ち始め、会の運営に至ったのは、現実の世界からではなくて、インターネットを始めたことがきっかけです。そして、ホームページを立ち上げ、ネットのなかで、本格的に関わっていくことになります。

1997年頃でしょうか。夫がパソコンを買ってきまして、「インターネットができるのだよ」と言いました。私はその頃“インターネットとは何なのか”よく分かりませんでした。興味を持っていたいくつかの事について調べてみましたら、たくさんのホームページが出てきました。私の周りには私と同じことに興味を持っている人がいなくても、世間は広くて、実際には同じ趣味の人が色々な所にたくさんいるのだと初めて分かり、「インターネットというのはすごいね」と言って始めたところからネットに参加するようになりました。

そしていろいろなページを見て回るようになって、ある小学校6年生の女の子と知り合いになりました。なぜかその女の子は、いつもネット上にいるのです。普通ならば学校へ行っているような時間に、チャット(文字で会話のやりとりをするもので、メールよりも即時性があるもの。文字電話のようなもの。)に参加していたりします。「どうして平日なのにネットをしているのか」と聞いたら、その子が、「実は私は不登校なのです。」と言いました。私は、「時間がたくさんあるからネットにいるのね。」と言って話しをした記憶があります。

その子とはいまでも年賀状を交換する仲なのですが、当時その子と話しているうちに、もしかして、引きこもりの人達はネット上にうろろしているのではないかと思いました。

そして「引きこもり」というキーワードで検索をしてみました。その頃は2~3しかホームページが出て来ませんでしたけれども、一応ありました。それから1年間位、そこの掲示板という色々な人が意見を書き込めるものを見て過ごしました。ただ読むだけではありましたが、引きこもる人達の心の内側を多少なりとも知ることが出来た気がしました。

どうして私が引きこもる人達の心に興味を持ったかといいますと、自分の息子も引きこもりの経験者だからです。

我が家は転勤族だったので、あちこち転勤して回っていました。息子は中学校2年生の時まではとても元気で、ちょっといたずらっ子みたいな、結構人から好かれるタイプの子でした。しかし、中学校2年生のとき、地方から埼玉の浦和に引っ越してきた時のことです。引っ越してすぐに、クラス全員による無視に合いました。それまでが余りにも楽しかったから、「あれは本当に天国と地獄だったよ、お母さん。あの日から僕は変わってしまったんだよ。」と、今でも息子は言います。

結局、高校でもいじめに合いまして中退を余儀なくされました。高校2年生の終わりに中退したのですけれど、その後、余り通わなくていい通信制高校に通い終了しました。一応高校卒の資格は取ったのですけれど、その後どうにも

動くことが出来なかったのです。

その時私は息子に、「1年間ぐらい休んだらいいではないか」と言ったのです。そうしたら、「うん」と言って、1年間ぐらいは家に居たのですけれども、その時の苦しみようは尋常ではなかったと言いますか、ゆっくりのんびり家に居るといふ感じではありませんでした。息子が言うには、堰を切ったように湧き上がってくる暴れたくなるような感情、怒りをおさめるために椅子に座ってガタガタ震えているときもありました。「これは何なんだろう、お母さん。」「何なんだろう」と、すごく言っていました。「これはちょっと普通ではないな」と感じました。

2年目も動けませんでした。あちこち病院にも行きましたし、カウンセラーの所にも行きました。私は、これはやはり、「引きこもり」というものではないかと気付くようになりまして、“引きこもりと言うのは、一体何なんだろう”という気持ちで、すごく私のなかに生まれました。

先の見込みがつけば親も安心して見守っていられるけれども、この苦しみようは何なのか、全く理解できないのです。どんどん不安になります。本当に悩んで、私も軽い鬱状態になってしまったのです。

“私の育て方が悪かったのではないか”とか、もう本当にいろいろなことを悩みました。ちょうどその頃、主人がパソコンを買ってきました。それで私も気晴らしをする気持ちでパソコンを触るようになったのです。

ちょっと息子のことをお話します。

いろいろな病院に行ったり薬を飲んだり、引きこもりの人達が集まる施設にも1年間位行ったりしてみました。今、息子は26歳なのですけれども、今までに10回位はバイトをしたと思います。“始めては辞め”“始めては辞め”です。そんな状態が続いたのですけれども、今から3年位前ですかね、「お母さん、一段落ついたような気がするから、しばらく家に居るよ。」と言いました。その時私は、「ああ、あなたも気を楽しみに家に居られるようになったのかな。」と言ったら、「そうかもしれない。」と言いまして、それから1年位たってから警備員のバイトに行き出しました。

それから1年3ヶ月位たちますけれども、結構元気に行っています。夜勤がほとんどなので、見ているで大変そうなのですけれども、それなりに職場での人間関係も出来てきたようです。

前は3ヶ月位すると、“気持ちがプツッと切れたように疲れ果てて辞める”というのがパターンだったのですけれども、今は、何か段々気持ちが楽になってきているのみに見えます。“きっと自分の足でようやく歩き始めたのかな”と思い、私はとても嬉しく思っています。

このごろでは家にお金を入れるようになりまして、「こんなに要らないわよ。」と言ったら、「いや、これが僕のプライドなのだから取ってくれ。」と言ってきます。

「有意義に使って欲しい」とか偉そうなことを言っていました。

それから一つ、息子が嬉しかったと言ったお話です。10日間位田舎で見張り

の警備についての時のことです。結構辺鄙な所だったのか、「八墓村みたいな所だったよ」と言っていたのですけれども、そこで夜の9時から朝の9時まで12時間、1月の本当に寒いなか、雨の日も、雪がちらつく日も、毎日ずっと一人で立って見張っている仕事だったそうです。そうしたら、ある日いつもの場所へ行くと、ビーチパラソルが道路端に差してあって、その下に暖かいお茶を入れたポットが置いてあったそうです。近所の人が、ずっと立っているのを見かねて置いていってくれたのでしょう。「とても嬉しかった」と言っていました。

そういう、何か、人のちょっとした親切というのは本当にありがたいものだなと思います。

そういう事が色々ありました頃、私もネットをやり始めたのです。

インターネットを始めて1年位経った時に、“親が本音を語り合えるページがあったらどんなに気持ち楽になるかな”と思いました。

本当にしんどい時というのは、いつしんどくなるか、自分でも分かりません。“ああ、今話したい！誰かと話したい！誰かに話を聞いてもらいたい！”と思う時があるのですけれども、そんな時、なかなか相談の電話をしても出してもらえなかったり、今は時間外ですと断られたりします。“親がいつでも本音を書き込めるページがあったらどんなにいいかなと思ったのです。”その頃はまだそのようなページがなかったので、娘にそのことを言うと、「なかったら自分で作るのがネット上では鉄則なんだ」と言われました。私は本当に機械が苦手なので、“どうしようか”と思ったのですけれども、娘に教えてもらいながら、作ってみたのが1998年の暮れのことでした。

「みんな大好き」というホームページです。みんな大好きというタイトルの理由は、そのころ「引きこもり」というものが世間的に認識されておらず、認知もされていなくて、誰も助けてくれる人がいない、そういう状態のなかで、せめて私だけでも“大好きだよ！”と言ってあげたいという気持ちがあったのだと思います。

ホームページを開設して掲示板をいくつか作りますと、色々な人が書き込んでくれるのですけれども、親御さん達はまだその当時はパソコンを触っている人が少なかったとみえて、実際には引きこもり当事者の人達が来られるのがほとんどでした。それも20代後半から30代にかけての方々に、そういう人達は不登校のページに行くこともちょっと年齢が違うし、親とういわけでもないし、行き場がなかったと思うのです。ですから、そういう人達がたくさん集まって来まして、交流はとても楽しいものでした。

今、“アダルトチルドレン”など、そういう認識を持っている若い人達が結構たくさんいます。私はホームページの管理人であります。また一方で、引きこもりの子を持つ親でもあります。「息子さんが引きこもったのはふみこさんのせいでしょう」ということを言われてしまうのではないかと、すごく心配だったのですけれども、そういったことはほとんどありませんでした。

逆に、自分の親ではないから気楽に話すことができたようです。本当は自分の親に聞いて欲しいのだと思います。そういう訳で、1日のホームページ閲覧数が200、300とありまして私もびっくりするくらいでした。

ホームページを開設して半年経った頃、ある女性から「自分は10年間引きこもっていて、今は会社員です。会ってみたいのですが。」というメールがきたのです。今でもよく覚えています。その女性は、「実は自分は仲間が欲しい、東京には自助会がないので、この際自分で作りたい、ふみこさん、協力してもらえますか」と、かなり強い調子で言われまして、すごい熱意を感じました。「では、お手伝いをしましょう」と言って、あちこちに行ったり、私もチラシを作って配ったりしました。それは私がネットから出て、初めて現実に行なった活動でした。

その人は名前を出してかまわないと思うのですが、**“いわたきみこさん”**という方で、東京に**「とびらの会」**という、引きこもり当事者の自助会を初めて作った人です。今はもう**「とびらの会」**は閉鎖して**「Rabbit」**という会になっています。

私は、彼女とのお付き合いの中で、私自身も**“何か現実の世界で出来ないだろうか”**と考えるようになったのです。そして立ち上げたのが**「引きこもりについて考える会」**です。

“引きこもりって何だろう”という素朴な疑問を皆で共有することで、何か生まれるものがあるのではないのかなというくらいのものでした。

もうひとつは、息子が**「生きるって何なんだろう。」**とか、**「死ぬって何なんだろう。」**とか、**「なぜ人は人を殺してはいけないのだろう。」**とか、何だかいろいろすごく難しい問題を私によく投げかけてきまして、**「こういう問題を根っこの部分から考え直さないと僕は前に進めないんだよ、お母さん。」**と、すごく言うのですね。**「それは本当にそうなのかもしれない」と**思いました。

私ひとりの能力ではとても答えることもできないし、分からないですので、**「皆で考えてみませんか」と**いう感じで掲示板に**「こういう会を作りたいのだけれど」と**書き込んだのが最初です。

その時私は、確かに当事者の人達だけの集まりである自助会というのは、引きこもりの人達にとって重要なものであるけれども、引きこもりという特性を考えると、当事者の人達だけで集まったら行き詰まっていくものがあるのではないかと思いました。結局、社会に出ていけない人達が自分達だけで集まっていることになってしまい、社会との接点とはなりにくい性質を持ってしまいうがしました。

私は、**“自分の会は社会に繋がっていくような要素を持った会にしたい”**と**思っていたこともあり、****“引きこもりについて関心のある方ならどなたでもどうぞ”**としたのです。つまり家族の人でもいい、援助者の人でもいい、引きこもりに関心のある人だったらどなたでも歓迎にしました。それがとても良かったようで、編集者や援助者、援助の勉強をしている人、お医者さん、カウンセ

ラー、それからマスコミの人達。私が思っている以上に色々な人達が集まってきました。そういう方達には、その職業の人、専門家というよりも、一個人として参加していただくということが大事だと感じました。それでこそ当事者と家族と一般社会の人達が対等に話し合う場になるからです。

1999年の8月に第1回の集まりをもちました。その時は、当事者の人達を中心に20人程の参加者がありました。それ以来月に1度、都内で集まりを開いています。また、会の後の飲み会も賑やかで、最近では二次会にだけ参加する人も結構多くなってきました。

会ではテーマを決めて、たたき台となる資料を作成しておき、それを元に話し合いをしているのですが、これまでに、たとえば、「成熟とはなんだろう」「大人になるとはどういうことだろう」「働くことの意味」「依存について」「親と子」等をテーマに話し合いをしました。

それから、参加者の人が自分の経験を皆の前で発表したり、ときにはゲストを招いて話し合ったりしました。会合を重ねるにつれて、会の中で、当事者の人達と外部の人達が、自然に結び付いていって、新しい動きが見られるようになりしました。

たとえば新宿でホームレスの人達のグループホームを運営している男性がいるのですが、この人が会へ参加なさっていたので、自然に引きこもり当事者の人達数名がグループホームに遊びに行ったり、ホームレスの人達のスープを配る活動に参加したり、あるいはグループホームにお手伝いに行っって賃金を頂くようになった人もいます。

また「自分達の力で仕事を作ろう」と呼びかけている援助者の青年が参加してくれたこともあるのですが、そのご縁で今バイトをさせていただいている人もいます。

それから引きこもりについての研究者同士とか、マスコミに関わっている人達同士の集まりも出来たりしました。私は、ただその場を設定しているだけで、勝手に色々な人達の交流が盛んになっていってずっと広がっていくのです。私は本当に何も出来ないのですが、そういう場を作れたことが良かったと感じています。

ただ、“現在、会は曲がり角に来ている”と感じています。それは単純に、人数が増え過ぎたということもありますし、もう一つに、「引きこもり」という言葉が社会に認知されるにつれ、様々な事情を抱えた人達が集まって来るようになったことでもあります。

規模が大きくなり過ぎたという点では、現在60名位いますので、話し合いをする時にも大変ですし、その後の飲み会には40名位が参加するのでそれも大変です。色々な人が集まって来るようになったという点では、若者から60歳近い人までが引きこもり当事者として参加されています。ですので、それぞれの要望、希望が多様化しています。そこをどうやっていくかが問題だと思っています。

す。今、これからこの会をどう運営していくかについて考えているところです。

“人は何故引きこもるのか”を考えていくと、何らかの原因で、“自分が自分の人生の主演であるという感じを持てなくなったからではないか”という気がします。でも、間違っているかもしれません。自分で歩くということの楽しさには、また一方で厳しさもあります。“厳しいけれども、楽しむ。”そんな感じを、少しでも感じ取れるようになってほしいと思っています。

それから、会の運営をしていて、彼らが抱える経済問題の厳しさを知ることになりました。家が余程裕福な人はともかく、ほとんどの青年が経済問題を抱えています。

実際に生活保護を受けている人が何人もいるのですけれど、その現実はとても厳しいものです。保護を受けると、逆に精神状態を悪化させる人もいます。それはある意味当然といえます。

今までは家のなかで守られていたのですが、生活保護は所帯分離して受けるようになりますから、自分が所帯主になります。そうすると、直接自分が役所の人と交渉しなければなりません。就労努力も、役所の人から直接求められます。だから、かえってとてもタフな精神力が必要になってしまいます。役所の方が余程理解がある場合は別ですけれども、普通はとても大変なことだと思えます。

そういう事情を考えるにつけ、もっと彼らに寄り添ったことが出来ないかと思うようになりました。

2年前に夫が定年を迎えたのをきっかけに、自宅近くに小さなアパートを借りました。それが「スペースワン」という“フリースペース”です。これは夫が将来英語教室を開くために借りた場所ですが、今すぐというわけでもないので、当事者の人達に開放することにしました。

“英語勉強会”と“パソコン勉強会”を週に一度ずつ開いています。“パソコン勉強会”といっても勉強するわけでもなく、おしゃべりをしたり遊んだり昼寝をしたり、色々です。

バイトに行く前に寄っていく人もいます。バイトへ行くということは結構緊張を強いられることでもあるので、その前にここでちょっとのんびりして、気持ちをほぐしてから行く人もいます。“皆がそれぞれ自分に都合のいい使い方をしてもらえればそれでいい”と思っています。7畳しかない部屋に8人も集まって賑やかなときもあります。

2002年6月ぐらいに、「同人誌の発行」を始めました。最初は私が言い始めたのですが、次第に皆、乗り気になってきて、原稿を集めようとしなくても書く人がたくさんできて、集まり過ぎる位です。同人誌を作ることをきっかけに、編集やレイアウト、イラスト等が好きであることに目覚めて、今年から専門学校に行くと言いだした人もいます。

私の会へ来る人達の特徴は、ほとんどの人が自分の意思で参加しているとい

うことです。親御さんに連れられてではなくて、ネット上で私のページを見つけたり、何かの本で知ったり、知り合った人達に聞いたから等が大半です。親御さんと一緒に来るといのはほとんどありません。それはとても特徴的なことかもしれないと思っています。自分で決めて行動するという意味で、もしかしたら援助団体の中にずっと入り込んでいる人よりは、進んでいるかもしれないです。

ただ、だからといって、そこからもう一步踏み出すということは、とても難しいようです。

ある経験者は、ずいぶん元気になってバイトもやっているのですけれども、その人は「何かをしようと思い始めてから2～3年たって、やっとそれを行動に移すことができる」と言っていました。それはかなり多くの当事者の人達に当てはまるような気がしています。だから、とても息の長い付き合いというものが必要になって来るのではないかと思っています。

それから、一般に、引きこもりの人達は自分探し系ではなく、自分というものを割にしっかり持っている人が多いような気がしています。

だから社会との摩擦もあるのです。いったん摩擦を生じると、乗り越えるのにエネルギーも時間もかなりかかるのではないかと感じています。

今の社会ではそういった場合に手助けをしてくれる人を身近に探すことは難しいのではないのでしょうか。これは色々な問題をこじらせる元になっているような気がします。

私も、本当に普通のおばさんですから、何も出来ないのですけれど、気を長く持って彼らと付き合っていけたらいいなと思っています。

私はすごく彼らから元気をもらっています。今日も「こういう所へ行って話すのよ」と言ったら、「ふみこさん大丈夫ですか、頑張ってきて下さい」「何とか切り抜けてね」とか、心配してくれるのです。「はい、分かった」とか自分も言ったりして。

そういうふうに励ましてもらって、“どっちがどっちか分からない”という感じもします。でもそれでも何か、“そういう関係がいいのかな”という気がしたりもします。

そういうことでお話をさせていただきました。ありがとうございました。

基調講演 3 児童青少年センター（ゆう杉並） 芦川 光伸

私は杉並区立の児童青少年センター「ゆう杉並」に勤務しております芦川と申します。今日のテーマは「居場所」ということで、私が主に接するのは中高生ですので、その居場所について、「ゆう杉並」の現状、様子などを交えながら、その必要性をご理解いただければと思い、力不足ながらお話をさせていただければと思います。

「ゆう杉並」というのは、主な利用対象を中高生とする大型の児童センターです。簡単に申しますと“中・高校生向けの児童館”ということなのです。

杉並区の真ん中あたりに位置しています。あまり交通の便がよくないのですが、中・高校生の大半は自転車で移動するので、彼らには、実際それほど不便でもないでしょう。

1日平均220人前後が利用しています。中学生が4割、高校生が6割ぐらいです。

この施設を建てるのにあたり、「建設中・高校生委員会」という会を設置して、中・高校生の声を吸い上げました。“バスケットボールをやりたいのでオールコートが取れる体育室が欲しいと”か、“天井は吹き抜けでゆったりとしたものにして欲しい”とか、いろいろ奇抜なものもありました。そんな意見を職員と子ども達で話し合いまして、大体それに沿った形で建設された施設になっています。

センターとしましては、自主活動を援助しながら健全な育成を図っています。

センターの役割としまして、四つの機能を持って取り組んでいます。中・高校生がここで、誰に何を言われるわけでもなくおしゃべりをしたり、楽器をちょっと鳴らしてみたり等、「フラッと自分の自由な時間を過ごせる場所」になっています。

「各自の興味、関心を追求する自主活動の支援をしよう」ということで、子ども達から希望を聞き取り、“ギターの講習会”や“ミキシングの講習会”等様々な講座やつどいを開いています。ミキシングとは、機械を使い演奏を編集することです。他にはダンスやバスケットをしている子もいます。

それから「利用者同士の交流や共同活動を推進しよう」と、“グループワーク”をしています。ダンスやバスケットボールなどを一緒にやることを通じて、活動をうまく進めていくにはどうしたら良いのだということをメンバー同士で話し合ったりしています。時には衝突したりしますが、“自分達で運営することを考える”“自分達で切り開くような力を養う社会的トレーニング”そういったことをしています。

それから、利用者自身の運営への参加ということで、前身の「建設中・高校生委員会」から現在は「中・高校生運営委員会」に引き継がれています。

利用者自身が施設の利用の仕方、講座についてなどを考え、要望を出し、職員と一緒に考えていく仕組みで運営がなされています。

「ゆう杉並」というのは、基本は“自由利用”です。

申し込みをした方でないと利用できないということはありません。普段自由にフラッと来ていただいて結構です。まずは受付で職員と顔を合わせて挨拶をします。何か目的がある子は自分の目的の所へ行きます。それ以外の子は、まずロビーをフラフラしながら、自由に時間を過ごすのですけれども、そのなかで自分の好きな事を見付けられるように、「講座情報」「施設情報」等を利用者に分かりやすく提供するように職員は心掛けています。

自由利用では、“体育室に行ってバスケットをする”“ホールでダンスをする”が中心になっています。最近では“ギターの弾き語り”が流行っていま

す。ホールで演奏をしていると、他の子が「何だろう？」と見に来て、何気ない会話が交わされたり、そういう形で仲間関係が出来ることもあります。他には、「自主的活動を支援しよう」ということで、“時間を決めて各部屋を団体利用として貸し切って使うことが出来る”ことになっています。

ここでは、『子ども達同士が、仲間や他の団体との調整をして、やりたいことを実行するにはどうしたら良いのだろうか、と自分達で考え、自分達で時間をつくり、自分達で行う、そういう過程を養っていくこと』を重視しています。自主性の支援としては、「中・高校生運営委員会」と「スタッフ」が、利用者と委員自身の声を吸い上げ講座の内容に反映させ、常にニーズに合わせた形をとれるようにしています。

私もそれ程この仕事が長くはないのですが、仕事のなかで感じたのは、「中・高校生の居場所」として「ゆう杉並」のような居場所が、今後、益々必要になって来るだろうと思います。

実際に、今は「安心して過ごせる居場所がない」のが現状だと思うのです。ゲームセンターもファミリーレストランもお金がかかります。「ゆう杉並」は無料です。そこが一番大きいのですが、また、色々な人と出会えるという面も持っています。公園等に溜まっていますと、近所の皆さんは、“何をしているのだ”と白い目で見たり、引いてしまったりという部分があると思うのです。別に、“そこに溜まりたい”という訳ではなくて、“そういう場所しかないから、そこに溜まっている”のが現状だと思うのです。少しでもそういう子どもたちが集まれる場所になればと思っています。

他には、学校や家庭で“自分の居場所がないのではないか”と感じさせる子どももよくいます。友達はあるが、上辺だけだったりするのです。「ゆう杉並」に来ると自分を解放できるようですが、そこに上辺だけの付き合いをしている子どもが来てしまうと、また様子が一变します。本音を解放できる場が必要なのではないかと思っています。

先に触れましたが自主活動を推進しているのですが、自分達で物事を作り出すことが大事だと思っています。色々な講座をするのですが、今まではこちらから提供することが多かったのです。物でも何でもありふれた時代ですので、有り難味がなかったり、参加してやっているという感じが強く感じられます。

一時バスケットボールをずっと行っていたのですが、それを止めたところ、「やりたい、やりたい」という声が出てきました。それをきっかけに、“自分達がやるためにはどうしたらいいのだろうか”と自ら考えて企画を立てて運営して行くという流れを探っていきたいと思っています。「物事を自分達で企画する」「行ってみる」という「場」が必要だと思っています。

また今の子どもたちは、なかなか他人から注意されたり、ルールについて言われたりすることがないと思うのです。ボールを勝手に使ってそのまま置いていたり、片づけもできない子もいます。そのへんをこの「ゆう杉並」の中で少しでも身に付けてもらいたいと私達は取り組んでいます。

スタッフの役割としては、“中・高校生が伸び伸びと過ごせる居場所としての充実を図る”ために、“余り過干渉にならないように、見守る、必要に応じて話しかける”というスタンスで関わっています。

特に大事にしているのが「トラブルを未然に防ぐ」ということです。どうしても他校の生徒が集まる所ですので、“あいつらは体育室の使い方が悪い”とか、そういったことでトラブルになりがちです。しかし、どうしても他人のことを考えるだけの度量がまだないので、職員、スタッフが入ることになってしまいます。出来ない部分に関しては補い、トラブルを未然に防ぐように取り組んでいます。

最近の特徴としては、挨拶をしてもなかなか返事をしてくれないことがあります。これについては、根気よく何度か話をするうちに挨拶や関係が出来たりしてきます。

他には、外でタバコを吸っていても注意されることは余りないと思うのですが、それでも、「ゆう杉並」に来てタバコ吸う子がかなりいます。社会のルールとしての指導に加え、ルールを守ることの重要性を話して理解してもらおう。そういう指導をするようにしています。

自分の物に関して、管理するという感覚が全くない子もいます。財布を出しっ放し、カバンを放置しっ放し等です。これらもスタッフと接することで、自分で考えてくれるようになると良いと思います。

次に、対象者ですが、現在、健常者、一人で来館できる子が中心になっているのですが、今後は障害をお持ちの方や不登校児童など問題を抱えた方にも使っていただけるように取り組んでいくことが今後の課題になっています。

司会 中・高校生の居場所がないということで、「ゆう杉並」ができました。他校の生徒達との交流にもなり、なかなかいい活動をされているなと思います。

さて、これからの時間は、今まで伺ったなかで、ちょっとまだ話し足りないところや、私どもが聞いてみて分かりにくかった点、大事なのでさらに詳しくお聞きしたい点などについて、伺いたいと思います。

まず、「たまりば」の西野さん、お願いします。
スタッフのこと、経費のことを伺いたいと思います。やはりこういう「たまりば」を作ろうとすると、まずお金、場所の問題が出てくると思います。借りるにも、維持していくにもお金がかかります。

それからスタッフを15人も抱えていたら、そのお金の問題もあります。そのスタッフはどういう人がスタッフなのでしょう。たとえば統合失調症の人がいればお医者さん、看護婦さん、薬の知識まで必要なのではないかと。暴力などが起こらないようにという点で、カウンセラー、ソーシャルワーカーの人が必要か。外部の方が小さなお子さんをお連れになるとしたら保育士さんが必要か。子育てのある人、たとえば親御さんが来てボランティアで手伝っているのかな

ど、そのへんのことを伺いたいと思います

西野 まずは運営維持の部分です。

お金に関しての部分ですが、まず子ども達、親御さん達からの会費収入があります。

会員登録制になっています。これが今年度予算でいうと年間で900万円位です。1月現在の会員数は126人です。その他に応援会員の方が約100人位います。これは施設を利用するわけではないのですが、趣旨に賛同して応援してくださる方です。それらを含め、何らかの形でお金を下さる方が220人程度になります。この合計が、今年度ですと900万円位になります。

1998年頃だったかと思いますが、定額のない任意会員制に変更しました。月謝みたいに毎月決まっていって、入会金いくらというのを全部やめたのです。各家庭で払えるお金を持ちよって、皆で場をつくりあうやり方に変えました。これは先ほど大塚さんの話にもありましたけれども、引きこもり傾向の年齢の高い若者達が、会費のために経済的に苦しむのです。ここではありのまま、生産性や経済性みたいなものからちょっと離れた価値観でいきたいと思っても、結局最後までいっても経済の壁が越えられないのです。大学に行った、就職した、結婚した、友達が皆そうやってお金を稼ぎ、自分の生活を成り立たせているのを見ているなかで、自分は親から「お母さん、“たまりば”へ行くからお金頂戴。」なんて、言えるかということです。そこでまた苦しみ、もう一回引きこもってしまう、落ち込んでいってしまう若者達も多くいます。

それだけが定額制の廃止の理由ではなく、ボランティアを廃止した問題や、色々なものが絡んでもいます。様々な理由を考慮し、結局、会費制度を見直して、“いくらでもいい”ということにしました。自分のおこづかいで来ている人は、1年間で1,000円の場合もあります。1日当たり数円です。それでも毎日通ってくる子もいます。一方で月に2万、3万と払って下さる方もいます。その合計金額が先程の900万円位になります。

ところが実際のところ、それでは全然維持できません。25坪のワンルームでたいしたことはないですけれども、それでも家賃だけで年間252万円かかります。他に色々な活動を含めると、年間予算は2,000万円位の規模になります。それ以外のお金をどこから引っ張り出すかが、私達の毎年の課題です。公的な補助金というのはありません。毎年色々な民間助成団体に助成金を申請してかき集めているのが現状です。なかなか民間の助成金を集めるというのは厳しいのです。単年度募集が多いものですから、2年、3年と複数年に亘ってお金をくれる民間財団はほとんどありません。ですから、毎年違うところに応募しなければならない不安定さを常に抱えています。

公的なお金といいますが、助成金ではないのですが、調査委託として川崎市から単発でもらいます。

あとは文部科学省からSSP（スクーリング・サポート・プログラム）のお金が出てきます。これは「不登校児童生徒の適応指導総合調査研究委託」とい

う、学校復帰を前提とした調査研究です。この予算の本来の目的は、どうしたら子どもたちが学校に戻るようになるかの調査、研究委託です。年間予算7億数千万円の予算がつきます。全国の公的機関633ヶ所にそのお金が流れます。民間機関では36ヶ所です。神奈川県では3ヶ所だけ民間団体におりています。その3ヶ所の一つが「たまりば」です。これは川崎市内で一ヶ所です。そのなかでも、学校復帰を前提としてない場所にお金が流れている「たまりば」は、極めて珍しい例ではないかと思えます。

最初の段階から一貫して学校復帰を前提としない、それを目的としないということで申請を出していますけれど、文部科学省が県教委を通じて、年間1,167,000円というお金を4年間に渡って出し続けています。でもこれも今年で終わるかもしれません。今度、SSN（スクーリング・サポート・ネットワーク）という新しいものになりますが、そちらから話は来ていません。

そういう状況で、資金としては非常に厳しいです。毎月色々なカンパや寄付をお願いしてやっています。それでも運営を維持していくのは大変です。

そのような中で、神奈川県の“フリースクール”“フリースペース”等五つの団体が経済的に支える仕組みとして「神奈川子ども未来ファンド」を立ち上げました。NPO法人として2003年3月には認証が下ります。その理事長に私がなっているんですけども、これは市民の皆さんや、企業、商店から様々な方法で寄付を集め、子ども・若者や子育てに関わるNPOに配分するしくみをつくり、神奈川の子ども達の未来のために投資をしようとするものです。このように、“皆でいくらかづつでもお金を出し合い、行政が担えない部分を民間でやろうとしている所にお金を回していく仕組み作り”をしています。目標金額は4,000万円です。お金が一定以上集まった時点で、虐待防止のプログラムを作る所、あるいは子どものホットライン、チャイルドラインなど、子どもの支援をしている様々な団体への資金援助を考えています。

まだ300～400万円程度しか集まってきていませんけれども、それぞれの人達が、それぞれの場所において協力して下さっています。

たとえば、“川崎市元住吉ブレイメン通り商店会”では、買い物袋持参運動とこの活動を連携させています。買い物に来られたお客さんが、袋を持参されたので「ビニール袋はいらない」とおっしゃった時に、本来商店が使うはずだったビニール袋代5円を、お店の人が、目の前の募金箱に入れるという仕組みです。だんだん活動参加団体が増えてきています。これなら、お客様は何の損もしません。商店も、どうせ必要であったお金を、子どもの未来のために使う。ゴミも増やさない。こういうことでポチポチとお金が集まってきています。

子どもの環境のため、子どもの未来のためにも、一人一人が意識して寄付という行為を通じて様々な生きにくさを抱えている親子を支援して行こうと、ファンド立ち上げになりました。

それからスタッフに関してですが、臨床心理士、保育士、あるいは学校教諭免許などといった資格は必要としない方向でやってきました。現在、世の中で

進みつつある心理主義といいますか、心の専門家ブームというのがはびこりつつあるなかで、難しい問題は専門家に任せた方がいいという傾向が日本社会の中を覆いつつあると感じます。しかし、たとえば臨床心理士の資格を持っていたとしてもそのままではほとんど使い物にならないのです。現場というのは、そういった資格がすぐに通用するような場所ではありません。もっと大事なものがあります。そして、それは簡単には伝えられません。私達スタッフは、長い時間かけてずっと研修を続けて、一緒に問題を考えあっています。

確かにスタッフには病気や薬の知識、福祉の仕組みの知識、カウンセラー的な要素、ソーシャルワーカー的な要素など、色々なことが要求されてくるのも事実です。しかし、まずは「分からないド素人である」というところから一緒にその子の人生に寄り添い続けること。どこかへ導いていこうというよりは、悩みながら寄り添い続けること。わたしたちの場合は、医療モデルではなく生活モデルというか、暮らしの場なのです。そして、私達に難しいと思われる問題に対しては、むしろ外にある資源をちゃんと確認しておくこと。ここにはこういう人がいる、ここにはこういう医療機関がある、この分野だったらこの医療機関がいいでしょうということを分かっている、そこに必要な形で繋いでいくことの方を重要視しています。

行政との連携を進めることも必要です。

神奈川県内で思春期サポート懇談会というのを立ち上げました。県警、様々な相談機関、フリースクール、学校の先生からカウンセラー、いろいろな人が全部入っています。そういうところに繋いでいくことを考えます。私達自身が全部を担おうとしたり、あるいは「専門性」を意識しすぎると、場の中味が変容して、危うくなっていきます。「私達の専門ではないです。手に負えない。」ということで、基本的に居場所というよりは排除する問題がでてきてしまうのです。

責任をとれるとか、とれないとかを持ち出して、結果的に相手を排除していくというのではなく、“一緒に過ごし合おう”ということを前提としています。

ただし、スタッフは自分自身の問題に気づいていないといけません。

暴力を振るう子がいたら慌てて飛んでいく、目の前でリストカットをしたら慌てて対応する、飛び降りようとしたら慌てて対応する、包丁を振り回したら慌てて対応する。もちろん慌てて対応したりしなければならぬシーンもあるかもしれませんが、ただ、相手のやったことに対して、ただ反応していただくだけだと、「ああ、今あのお兄さんが飛んで来てくれた。そうか、今度はあの人を独占したいときは自分で暴れればいいのだ、誰かを殴ればいいのだ、手首を切ればいいのだ。」ということ子どもは学習していきます。

そうすると、場の中で、さらに不安定な要素がどんどんはびこってきます。私達もたくさんの失敗を重ねながら勉強してきました。

子どもと関わる以前に、私達自身の問題、どういうときに怒りを感じ、悲しく

なり不安になるのか、そういう自分自身の問題をどう整理していくのかを、ずっと自分で見続けようとする、それが私達のスタッフの最も大事なことだと思います。そのための研修を重ねています。その研修内容等に関してはまた時間があれお話をさせていただきたいと思います。

司会　すごく大事なお話をしていただいたと思います。専門性ではなく、どれだけ外の資源と連携できているか、西野さんが10年間かけてそういうのを作られたことが、「たまりば」の成功に繋がっていると思います。

今後、私どもが「居場所」を作っていくためには、資金の問題が出てくると思うのですが、行政の助成は全然受けていませんか。

西野　はい。行政に関してはいまのところ、この分野に関する補助金という仕組みがないですね。だからこれからさまざまな形で行政とのパートナーシップが必要になってくると思います。私達のノウハウの提供を考えています。

不登校児童・生徒の居場所に関する話し合いの場を教育委員会・市民局・私達NPOとの間で定期的に行っています。私達の意見は常に伝えてはいますが、お金の流れる仕組みというのはまだできていないですね。

司会　「引きこもりの親の会」等のように、“作業所”という形で行政からの助成金を得ているところもあるのですが、「たまりば」は作業所ではないわけですね。

西野　はい。“作業所”という形は現在まではとってきていません。精神障害や知的障害の手帳を持っておられる方も何人かおられますが、あえて作業所という形でお金をとることは、現在のところ考えていません。

司会　ありがとうございました。
では大塚さんの「スペースワン」では、会費含み、経済的な分野はどうなっているのでしょうか。

大塚　「スペースワン」は先程お話したように、主人が定年後、英語を若い人達に教える仕事をしたいというのがありましたが、定年になってみると“元の会社に時々行ってバイトする方が良い”と思うようになりました。そこで引きこもりの人達に開放することにして、主人が、週に1度、当事者の人、3～4人に英語と一緒に勉強するようになりました。その時、主人と私で色々考えたのですが、アパートを借りるのにいくらか家賃がかかるのですが、これから何年間やるかわからないけれど、払える間は自分達で払っていこうと思いました。

今は利用者の方には月々500円を光熱費としていただいています。家族の方の支援がない場合は、本当に昼御飯抜きの人もいるのです。来てもぜんぜん食べないなと思ったら「お金がない」と言うのです。JRに乗ると高くつくので

わざわざ私鉄を乗り継いで来る人もいるのです。そういうのを知っているの
で、とりあえずは来てもらうのが一番というのがあります。
もし主人のバイトが終わりになった時には、またそこで考えればいいのではな
いかと思っています。老後の趣味みたいなものですが、息子も“それでい
いではないか”と言ってくれているので、家庭円満になりましたので、今は
これでいいと思っています。

司会 ありがとうございます。

大塚さん、先ほど「クラヴェリナ」という雑誌を配られましたね。当事者の人
達がつくられた機関紙ですが、あれは一冊いくらでしょうか。

大塚 200円です。送料をいただいて発送もしていますので、スペースワ
ンのほうへお問い合わせください。レイアウトや写真まで、すべて当事者の人達
でやっています。

司会 ありがとうございます。